東京国立近代美術館

# 中高生プログラム

自分をちょっと
はみ出ると…

# 記録集

2025－26年

東京国立近代美術館 中高生プログラム
自分をちょっとはみ出ると…

# 記録集

2025－26年

# 「中高生プログラム　自分をちょっとはみ出ると…」記録集発行にあたって

2025年10月に「中高生プログラム」の初回が行われた*。一般公募で集まった中学1年生から高校2年生が、当館所蔵作品やアーティスト・専門家と出会い、ワークショップ、また参加者同士のコミュニケーション等を通じて、美術への理解を深め、美術の魅力に触れるプログラムである。参加した中高生たちはプログラム前半の体験をもとに、2026年3月に小学生に美術の魅力を伝える「ビジュツ発見隊」を企画し、その案内役を担っていくこととなる。

今回の中高生プログラムの副題「自分をちょっとはみ出ると…」には、中高生たちが自身の枠を少し広げる機会となれば、という期待を込めた。

2025年10月から翌4月までの7ケ月、全8回実施された各回の内容は、本記録集をご参照いただきたい。

この全8回に及ぶ長期プログラムは、時系列に沿って3つのフェーズがあった。

まず、中高生が新たな事象を体験し、学び、講師や参加者同士で交流する第1フェーズ。次に、それらの体験を資源として、小学生を対象とするプログラムをグループに分かれて企画・実施する第2フェーズ。そして、プログラムを振り返る第3フェーズである。

第1フェーズでは、外部講師の学芸員、アーティスト、当館研究員等による、美術、作品、美術館にまつわる多様な視点が示された。中高生にとって、美術館での新たな体験や人との出会いの機会となった。毎回のワークショップやグループワークを通じて、中高生が相互に交流し、対話する機会が重ねられた。

第2フェーズでは、小学生に美術の魅力を伝える「ビジュツ発見隊」を中高生が企画・運営した。第1フェーズで得た学びや体験をもとに、中高生がA～Dの4グループに分かれ、「ビジュツ発見隊設計シート」を作成し、実施内容を検討した。所蔵作品展をどのように巡るか、どの作品を一緒にみていくか等を考え実践した。「ビジュツ発見隊」当日は中高生と小学生がひとつのグループになって活動した。これまで学ぶ側だった中高生が、小学生を迎え導く側へと転換する、中高生プログラムのハイライトである。

実施したプログラムの振り返りが第3フェーズである。「今日の絵日記」および、「ビジュツ発見隊」の振り返り、さらに中高生プログラム全体の振り返りが行われた。

「今日の絵日記」とは、中高生が毎回の終了後に個々のスケッチブックに感想を書き留めたものであり、その日に印象深かった出来事等が文字やイラストで記されている。小学生を迎えた「ビジュツ発見隊」では、グループごとの振り返りを作成し、全体で共有した。プログラムの最終回にはこれまでの全7回を振り返り、改善点についてコメントが寄せられた。

「ビジュツ発見隊」に参加した小学生については、過ごした時間の楽しさや、小学生が思っていたよりしっかりしていた／幼かった、視点が新鮮だった、真面目だった等の感想があげられた。一方で中高生たち自身の企画・運営については、緊張してうまくいかなかった、小学生ともっと話せばよかった、臨機応変な対応は難しかった等の反省があげられた。プログラム全体を通しての成果については、さまざまな人と関わり、考え方を聞けた、中高生同士が交流できた等といった意見があった。改善点としては、「今日の絵日記」を見直す時間が欲しかった、アウトプット（「ビジュツ発見隊」）の実施時間が短かった、各回のプログラムのつながりが薄かった等の指摘があった。これらの振り返りは、次の中高生プログラムに反映することになるだろう。

そして重要だったのは、プログラムを支える教育普及室職員のいわば黒衣のような働きである。中高生が考えや思ったことを自由に発言でき、発案したことに取り組む自主性が発揮できる場を整えて支えた。発言や意思表示を受け止め、傾聴、見守り、励まし等を態度や言葉を通して示し、中高生が主体となるプログラムの環境をつくる役割を果たしていた。

一般に中高生は、当館所蔵の近現代美術に親和性の高い年齢層であると考えられる。中学校から「美術」の授業が始まることや、明治以降の歴史について一定の知識を有していること等が、その理由にあげられる。ところが、日本の美術館において中高生対象のプログラムは小学生に比して少なく、美術館に来館する中高生は必ずしも多いとはいえない。塾や部活、受験等で忙しいことや、美術への関心を向ける機会が学校の授業や部活動以外には少ないこと等が背景にあるのだろう。プログラムを実施する美術館側にとっても、参加者を集めにくいという事情がある。

この中高生プログラムを通して参加者それぞれが、美術や美術館と関わりを築き、将来にわたって長く付き合っていくきっかけとなればと願う。家庭でも学校でもない、アーティスト等によるさまざまな表現に満ちた場である美術館で行われる中高生プログラムが、日頃のしがらみから離れ、自分自身を素直に表出できる「もうひとつの場所（サードプレイス）」となることを期待する。

端山聡子（東京国立近代美術館 教育普及室長）

* 東京国立近代美術館「中高生プログラム」募集 https://www.momat.go.jp/topics/20250912（2025年9月12日公開）

東京国立近代美術館

# 中高生プログラム

自分をちょっと
はみ出ると…

日程：2025年10月18日（土）～2026年4月18日（土）
会場：東京国立近代美術館
対象：中学生・高校生
参加費：無料
参加人数：17名

記録集発行にあたって …… 06

**1**
10/18（土）
10:00-14:00

**美術館と出会う、仲間と出会う** …… 10
1 自己紹介カードの制作
2 東京国立近代美術館の館内を歩き、美術館を体感
3 ワークショップ「物語をつくる」

**2**
11/29（土）
10:00-14:00

**作品／展示を見る、視る、観る** …… 12
1 榎本寿紀さんと、身体を使ったいろいろな見方を実践
2 豊嶋康子さんの作品をみる・展示をつくる話をきく

**3**
12/20（土）
10:00-14:00

**自分と向き合う** …… 14
1 吉國元さんのお話を聞き、自画像を描く
2 当館所蔵の自画像をみて、話す

**4**
1/17（土）
10:00-14:00

**異なる文化、異なる言語｜美術の点検①** …… 16
1 牧原依里さんのお話／ろう者と一緒に作品をみる
2 大嶋貴明さんによる「美術」の点検①

**5**
2/28（土）
10:00-14:00

**美術の点検②｜「ビジュツ発見隊」の準備①** …… 18
1 大嶋貴明さんによる「美術」の点検②
2 「ビジュツ発見隊」の準備①

**6**
3/14（土）
10:00-14:00

**作家と出会う｜「ビジュツ発見隊」の準備②** …… 20
1 浅見貴子さんのギャラリートーク
2 「ビジュツ発見隊」の準備②

**7**
3/28（土）
9:00-14:00

**小学生が参加！「ビジュツ発見隊」本番** …… 22
A～Dグループ、それぞれのプランで小学生に美術を案内

**8**
4/18（土）
10:00-14:00

**この7ヶ月をふり返る** …… 28
1 津田友美さんのお話
2 榊原健祐さんのお話
3 これまでの全7回のふりかえり、中高生からコメント

各回概要執筆：山本桃子（東京国立近代美術館 教育普及室）

参加者・講師・職員一覧 …… 34


プログラム内で観覧した展示

| 会期 | 場所：4階1室～2階12室 | 場所：2階 Gallery4 |
|---|---|---|
| 2025.7.15-10.26 | 2025-1 所蔵作品展 MOMATコレクション | 新収蔵＆特別公開｜コレクションにみる日韓 |
| 2025.11.5-2026.2.8 | 2025-2 所蔵作品展 MOMATコレクション | 没後30年 榎倉康二 |
| 2026.3.3-5.10 | 2025-3 所蔵作品展 MOMATコレクション | 新収蔵＆特別公開｜メダルド・ロッソ《Ecce Puer（この少年を見よ）》 |

# 1 美術館と出会う、仲間と出会う

10/18（土）10:00–14:00

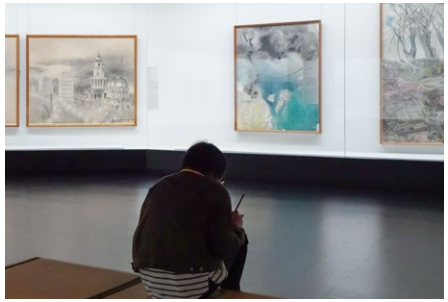
中高生向けプログラムに参加した17名が、東京国立近代美術館（以下、当館）に集まった。初来館の参加者も多く、やや緊張した様子でバックヤードに足を踏み入れていた。

冒頭では、自己紹介カードに名前と現在夢中になっていることを思い思いの画材で描き、全体で発表。続いて参加者は4グループに分かれ、所蔵品ギャラリーを巡覧した。各自が気に入った作品を1点選び、その作品と自分が「会話する」という設定で物語を創作した。原田直次郎《騎龍観音》や大竹伸朗《ニューシャネル》などを題材に、参加者は自由な発想で原稿用紙へ脚本形式の物語を執筆。その後、互いに発表し合い、作品を通して浮かび上がる興味や関心を共有した。

## 1 自己紹介カードの制作

## 2 東京国立近代美術館の館内を歩き、美術館を体感

## 3 ワークショップ「物語をつくる」



# 2 作品／展示を見る、視る、観る

**11/29（土）10:00–14:00**
**講師：榎本寿紀**

榎本寿紀さんの案内のもと、所蔵品ギャラリーの４階1室を起点に作品鑑賞の多様なアプローチを実践した。しゃがんで視点を変えたり、手を丸めて光を遮りながら作品を覗き込んだり、作品との距離を意識したりと、自らの身体を使って「様々にみること」を体験。こうした試みをしながら、４階および３階の展示フロアを巡った。

午後は２階の所蔵品ギャラリーおよびGallery4に移動し、豊嶋康子さんの《マークシート》《鉛筆》《定規》《安全ピン》を鑑賞。続いて、展示を担当した研究員の佐原しおりさんに対し、「展示をつくること」をテーマに質疑応答が行われた。身近な文房具を用いて制作する豊嶋さんの姿勢に対し、参加者からは「世間の評価に合わせた作品を作ろうとは思わなかったのか」「安全ピンを曲げているとき、どのような心境だったのか」など、作品についての率直な問いが相次いだ。

これらの質問に対しては、後日、豊嶋さん本人が回答する動画が撮影され、参加者に共有された。

**榎本寿紀**　美術家・大分県立美術館教育普及室長

創作活動を行う傍ら、1991年から2012年まで目黒区美術館ワークショップ・エデュケーターとして子どもから大人までの美術プログラムに関わる。2014年より大分県立美術館に移り、教育普及室長を務める。

**豊嶋康子**　美術家・東京造形大学教授

1993年東京芸術大学大学院美術研究科修了。1990年より作品発表を始める。日常社会の制度や仕組みを批評的に捉え、人間の思考の「型」を見出すことをテーマとして、作品を発表している。近年の主な個展は「発生法 ── 天地左右の裏表」（2023、東京都現代美術館）など。

**佐原しおり**　東京国立近代美術館美術課研究員

東京国立近代美術館美術課研究員。群馬県立館林美術館、埼玉県立近代美術館を経て、2023年より現職。所蔵作品の管理や、所蔵作品展の企画を行う。主な企画に「戸谷成雄彫刻」（2023、埼玉県立近代美術館）など。

## ① 榎本寿紀さんと、身体を使ったいろいろな見方を実践

## ② 豊嶋康子さんの作品をみる・展示をつくる話をきく

# 3 自分と向き合う

**12/20（土）10:00–14:00**
**講師：吉國元**

中高生はアフリカ・ジンバブエ出身のアーティスト、吉國元さんとともに制作に取り組んだ。冒頭では、吉國さんが自身のルーツや制作において大切にしている考え方について語り、「自画像とは鏡に映る姿をそのまま写すものではない」とのメッセージが示された。続いて、吉國さん自身が制作に用いる板段ボールとパステルが配布され、これまで「肌色」の固有色とされてきたペールオレンジを取り除いたうえで、自画像制作に臨んだ。色の制約とともに、自分自身をどのように表現するかが問われた。

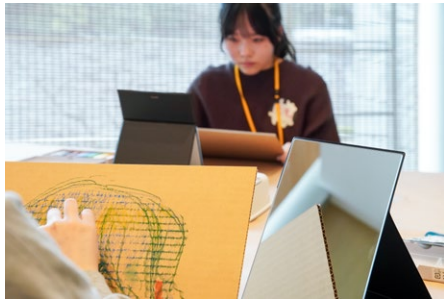
参加者は制作中、鏡と画面を交互に見比べながら、限られた時間の中で集中して手を動かした。午後には完成した作品を持ち寄り、それぞれが制作時の意図や工夫について発表し合った。

さらに、2階のGallery4に展示されていた靉光《自画像》を鑑賞。作品が生まれた時代背景や作家の内面に思いを巡らせ、全員で意見を交わした。

**吉國元**　美術家

ジンバブエ・ハラレ生まれ。1996年日本に移住。2015年に多摩美術大学造形表現学部造形学科油画科卒業。2020年、在日アフリカ人を取材する『MOTOマガジン』を創刊。VOCA展2021選出。主な個展に「深い河（DEEP RIVER）」（2025、LAG）など。

## ① 吉國元さんのお話を聞き、自画像を描く



## ② 当館所蔵の自画像をみて、話す

靉光《自画像》1944年

# 4 異なる文化、異なる言語 ― 美術の点検①

**1/17（土）10:00–14:00**
**講師：牧原依里、大嶋貴明**

牧原依里さんと、大嶋貴明さんを講師に迎え、美術の多様な可能性について考える取り組みを行なった。午前は、牧原さんが自身のルーツであるろう者の文化を紹介しながら、ろう者と聴者の関係性を糸口に「自分と異なるコミュニティについて考える」ことの意味を解説。中高生は、ろう者から手話を学びつつ互いに自己紹介を行い、言語や文化の違いを体験的に理解した。その後、2階のGallery4に移動し、榎倉康二の写真作品数点を鑑賞。バックヤードに戻ってからは、ろう者と中高生がそれぞれの気づきや感想を付箋に書き出し、共有するワークを実施した。

午後は大嶋さんを講師に「『美術』を点検すル!?」をテーマに、講義とワークを展開。「美術と図工の違いは何か」という問いを起点に議論したほか、2人組みで当館所蔵品の写真カードを使って、「あやしさ」と「まっとうさ」という独自の基準で分類・再構成するワークに取り組んだ。

**牧原依里**　映画作家・演出家、ろう者

ろう者の「音楽」をテーマにしたアート・ドキュメンタリー映画『LISTEN リッスン』(2016) 共同監督の他、『田中家』(2021)、レクチャー・パフォーマンス《聴者を演じるということ 序論》(2023)、舞台《黙るな 動け 呼吸しろ》共同演出・構成など。

協力者：佐藤萌以、並木晴二郎、林醍醐味、湯山ニコラス
手話通訳士：小松智美、村山春佳

**大嶋貴明**　美術家・元宮城県美術館教育普及部学芸員

1975年から現在まで、地元仙台を拠点に数多くの作品を発表。その傍ら、1976年から仙台市内で画塾「大嶋画塾」を主宰、1995年から2021年までは宮城県美術館の教育普及部に在籍。過去に嵯峨美術大学他で非常勤講師、現在も東北生活文化大学で非常勤講師を務めている。

## 1 牧原依里さんのお話／ろう者と一緒に作品をみる

## 2 大嶋貴明さんによる「美術」の点検①

# 5 美術の点検②——「ビジュツ発見隊」の準備①

**2/28（土）10:00–14:00**
**講師：大嶋貴明**

大嶋貴明さんを再び講師に迎え、「『美術』を点検すル!?」取り組みの後半が実施された。午前は、休館中の２階テラスを会場に、大嶋さんとともに作品と年齢・年代の関係について考察。参加者は年表を用い、自身のこれまでの経験を付箋で貼り出して可視化するワークに取り組んだ。作品が制作された時代とそれをみる人の年齢、さらにそれを取り巻く社会状況など、美術作品を「みる」という行為には多様な要素が含まれていることを確認した。

あわせて、前回の宿題である「美術館で不思議に感じたこと」「美術館に通うようになって気づいたこと」を回収。これらの問いに対しては、後日、大嶋さんから返答が寄せられた。

午後は、1カ月後に実施予定の「ビジュツ発見隊」に向けた準備を実施。参加者はＡ～Ｄのグループに分かれ、小学生とともに行う活動内容を検討し、設計シートにアイデアを出し合った。

## 1 大嶋貴明さんによる「美術」の点検②

## 2 ビジュツ発見隊の準備①

# 6 作家と出会う ―「ビジュツ発見隊」の準備②

**3/14（土）10:00–14:00**
**講師：浅見貴子**

当館所蔵作家の浅見貴子さんを講師に迎え、3階10室に展示中の浅見さんの作品《梅に楓図》の前でお話を伺った。制作において大切にしている姿勢や使用する画材・筆、制作方法について語られた。浅見さんからは「和紙の裏側から墨を施し、表面ににじみ出させることで、点描のように表現する」といった独自の技法が紹介され、作家と初めて直接向き合う中高生からは質問が相次いだ。実際に自分の言葉で質問して作家に応答してもらう経験を通して、制作の考え方や制作過程への理解が深まった。

その後、参加者は「ビジュツ発見隊」に向けた準備としてグループごとに館内を巡り、小学生を案内するルートを検討。午後には設計シートを完成させ、必要な準備物や配布資料の確認、当日の役割分担などを具体的に詰めた。小学生に美術の魅力をどのように伝えるかについて詳細に確認し、各グループで準備が進められた。

**浅見貴子**　画家

1988年多摩美術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。1992年より個展を中心に和紙に主に墨を使った絵画を発表。2007年文化庁新進芸術家海外研修員としてニューヨークに滞在。過去に「第7回 東山魁夷記念 日経日本画大賞展 大賞受賞（2018）」。主な個展に「大きな木」（2025、柴田悦子画廊）など。

## 1 浅見貴子さんのギャラリートーク

浅見貴子《梅に楓図》2009年

## 2 ビジュツ発見隊の準備②

# 7 小学生が参加！「ビジュツ発見隊」本番

3/28（土）9:00–14:00

「ビジュツ発見隊」本番当日、中高生は午前９時に集合。10時から参加者の小学生を迎えるにあたり、各グループで最終確認を行い、準備を整えた。17名の小学生が４グループに分かれ、「ビジュツ発見隊」スタート！

Ａグループは、４階から２階の展示室と屋外彫刻を巡るルートで小学生を案内。鑑賞後には、画用紙に感想を記入してもらい、体験を言葉と絵で振り返った。Ｂグループは「美術に『面白い！』を見出そう」をテーマに、中高生自身がこれまで学んだことをベースに作品を解説。小学生は「自分にとっての美術の面白さとは何か」を問いとするワークシートに向き合った。Ｃグループは、鑑賞のポイントを共有した後、小学生が自由に展示室を巡る時間を設定。自分に似ている作品や気に入った作品を写真に収め、バックヤードに戻ってからスケッチブックに感想をまとめ、グループ内で発表した。Ｄグループは「自分自身の『好き』を見つける」をテーマに進行。中高生が自身のお気に入りの作品を紹介した後、小学生も1点を選び、その写真をもとにポストカードを制作した。さらに、互いに作品の「好きなポイント」を発表し合い、みるおもしろさを共有した。各グループの工夫を凝らした活動を通じて、小学生と中高生がともに美術の楽しみ方を探る一日となった。

## ビジュツ発見隊

日時：2026年3月28日（土）10:00–12:00
会場：東京国立近代美術館
対象：小学５・６年生
参加費：無料
参加人数：17名

*

*

## Aグループ　中高生３名、小学生４名

*

*

*

*

*

## Bグループ　中高生４名、小学生３名

*

## Cグループ　中高生４名、小学生６名

*

## Dグループ　中高生４名、小学生４名

# 8 この7ヶ月をふり返る

**4/18（土）10:00–14:00**
**講師：津田友美、榊原健祐**

最終回は、中高生プログラムの記録映像の撮影を担ってきた映像ディレクターの津田友美さんと、募集チラシや記録集のデザインを手がけた榊原健祐さんを講師に迎え、それぞれの仕事についてお話を伺った。講義では、「ドキュメンタリー制作の現場で直面した困難は何か」「デザイナーとアーティストの制作物はどのように異なるのか」といった問いが参加者から寄せられ、クリエイティブな職業の実際の様子について理解を深めた。

後半では、これまで実施してきた全7回のプログラムを振り返り、模造紙を用いて意見を整理。「さらに知りたかったこと」「印象に残った点」「改善してほしい点」などについて、中高生から率直なフィードバックが共有された。「学芸員や評論家、研究者の話をもっと聞きたかった」「日常生活では意識する機会の少ない美術に向き合えたことが貴重だった」といった意見が挙がるなど、今後のための課題と今回の成果が共有された。

**津田友美**　ディレクター／アシスタントプロデューサー（メディア・メトル株式会社）

San Jose State University ジャーナリズム学科卒。ドキュメンタリーを中心に、ディレクターとして国内外を飛び回る。主な番組として「ガイアの夜明け」や「情熱大陸」を制作。近年は企業プロモーション映像や映画の制作も行っている。

**榊原健祐**　グラフィックデザイナー／アートディレクター（Iroha Design）

文化施設、美術館、展覧会、VI計画を中心に、グラフィックデザインおよびブランディングを手がける。主な仕事に、「第25回ICOM（国際博物館会議）京都大会2019」ロゴタイプ、「文化庁『DOMANI・明日』展」（2020–23）アートディレクション、「旧富岡製糸場 西置繭所」展示サイン計画（2020）などがある。

## 1 津田友美さんのお話

## 2 榊原健祐さんのお話

## 3 これまでの全7回のふりかえり、中高生からコメント

多田美波《Chiaroscuro》1979年

2025.12.20

# カラフル！

中　東京　×2

日本語
日本手話
など

② 「美術」と「図画工作」のちがい・あやしさ

自分でもつくれるとう
本当に作品なの…!?

楽しかった

色合いい

色を使う
表たのしさ
を知った!!

自分と向きあう

5/28（土）　ワークショップ本番

小学生（五から六年）の七人とワークショップを
小学生は真面目に美術を鑑賞してい
独自の着眼点をもっていて（絵画にきそく性
自身に新しい視点をもらえた。

中高生プログラム
第6回（3/14（土））

浅見実子さんの話!!（作者さん）

制作秘話
こだわり
画材…
さまざまなお話を聞けた

春

黒も使用

大きい半

中高生プログラム本番への準備!!
展示室を見たり、話し合ったり、書いたり…

最後に、ダ子会!?

それぞれの木の特徴もあっていて（左の木でしたっ…

自画像

画像の制作をしたことによって、自分をみつめなおすことが
できました。今の気持ちや、自分はどんなものかがわかり
た。
々な人達に絵をおしえてもらったことも
では、少し上たつしたと思いました。

ちゃんとやり半分

## 最後の余会

もうプログラムが終わってしまった
あっという間に半年間がたってしまった
またこのようなイベントに参加したい

## 4/18 中高生プログラム 最終回!!

もうタ
に書いて

今日は最終回だったけれど全員そろわなかった…
最後にもう一度お話したかった。でも楽しかった。
朝は早くてねむいんだけれど、毎回毎回新しい
ったいとっても楽しかった!
ばらさんと、写真 動画を
お話を聞きとても楽しかった
いろな実際の作品やイベント
ったし、つださんの話はお
きでとても楽しい最終回だっ

## 中高生？

大人になったような、
子供のままでなような、
そういう刀…的な
気持ちで生きてます。

自分の周りのアイデアを
何かに突き動かされる
自分の役割+αができる。

少しずつ影響して、影響され
社会に溶けていくような

大人になるとはそういう
存在が社会と同化していく
ことだと思った。

半年で私はどれだけ
大人になれたのだろうか

3/28（土）

## ビジュツ発見隊

「美術の新しい楽しみ方を知る」

自分たちの取り組んでいるプログラム、「自分をちょっとはみ出すと、」
で知った美術の新しい姿を、小学生たちにも知ってほしい。
そのためには小学生たちが手がけてもらうことが良い。

りつまりの自分”

〈こと〉
2人の方のお話しを聞いた

〈感想〉
映像をとりに海外に行くのが楽しそう
だなと思って興味をもった。
仕事の大変さなど知らなかったことがあった
デザインには、沢山の作品に触れられて
ワクワクするものだなと思った。これから
デザインに注目しながら生活してみたい!

〈全体の感想〉
・長いようで短かった。
・おもい返すと色んな学びをしていい
経験として活かせる時がくるといいなと思う
みんなに感謝です!

3/28　小学生と学んだ日

小学生に、今まで計画してきたものを見せた。意外にもみんな
を示してくれてやりやすかった。美術にもともと興味がなかった子も
のテーマについて考え、発見してくれた。変に考えすぎてない純粋
見が多くて、自分も考えこんでしまうような学びになるものだった
で私の中でアートは自分1人で楽しむものという概念だ
も交流して触れる美術がこんなにおもしろいんだと

## ヒミツ発見隊本番

〈感想〉
・めっちゃ緊張したけど、伝えたかったことが伝えられた
・楽しかった♥

すごく緊張したけど伝え
熱意を…
しっかり伝えられた。小学生の疑問
に対して一緒に広げながら考え
られた。

**中高生プログラム参加者**

石塚 京佑（中学２年）
井上 直郁（中学1年）
大槻 仁以奈（高校1年）
覚野 健介（高校２年）
木村 花（中学２年）
栗山 百見（中学３年）
佐藤 悠樹（中学２年）
白井 亜花莉（高校２年）
辻田 大知（高校1年）
中井 このは（中学２年）
春木 亜珠実（高校２年）
平山 芽衣（高校1年）
松尾 芽依（中学３年）
松尾 凜桐（中学２年）
宮下 ぽぷら（中学1年）
森子 桃百（中学３年）
山本 敏久（高校1年）

**ビジュツ発見隊参加者**

小学５・６年生　17名

**講師**

榎本 寿紀（美術家・大分県立美術館教育普及室長）
豊嶋 康子（美術家・東京造形大学教授）
佐原 しおり（東京国立近代美術館美術課研究員）
吉國 元（美術家）
牧原 依里（映画作家・演出家）
大嶋 貴明（美術家・元宮城県美術館教育普及部学芸員）
浅見 貴子（画家）
津田 友美（ディレクター／アシスタントプロデューサー）
榊原 健祐（グラフィックデザイナー／アートディレクター）

**スタッフ**

端山 聡子
齊藤 佳代
山本 桃子
吉岡 萌
植杉 奈央
弭 書榛
六島 芳朗
石塚 美和
（東京国立近代美術館 教育普及室）

本誌内の学年および講師肩書きは2026年3月当時

**発行**
東京国立近代美術館
102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1

**発行日**
2026年5月

**デザイン**
Iroha Design（榊原 健祐、榊原 吏海）

**イラスト**
松田 奈津留

**撮影**
渡会 春加（*マークのついた写真）

このプログラムは、子ども達が芸術に触れる機会の拡大を目指す国立美術館全体の取り組みである「Connecting Children with Museums」のひとつで、Adobe Foundationのご支援のもと実施されています。
「Connecting Children with Museums」のその他の取り組みについては、こちらからご覧いただけます。https://odekake.artmuseums.go.jp/

**Connecting Children with Museums initiative is supported by the Adobe Foundation**

Adobe Foundation

MOMAT